

東京新聞

2020年(令和2年)12月7日(月曜日)

PCR検査断られ「病死」

亡くなつたのは金沢大薬学系准教授の高橋広夫さん（四〇）。妻（四三）や知人の話では、高橋さんの自宅は県外にあり、金沢市内に単身赴任していた。十一月十六日に強い倦怠感があり、自宅療養中の二十日には三五度台の発熱があった。（二十一）日に医療機関を受診したところ、インフルエンザの検査は陰性で、薬を処方された。本人は「近くの医院」と話していたといふ。

妻や知人とのメール記録によると、高橋さんは二十一日、石川県発熱患者等受診相談センターに電話してPCR検査を受けたいと伝えたが、「かかりつけ医の判断がなければ検査は受けられない」と告げられたといふ。

通院後、熱は三七度台以下がつたが、せきやのどの痛みが出たため、二連休明けの二十四日に同じ医療機関を再受診した。二十五日朝、妻がチャットでメッセージ

石川県の窓口「医師の判断必要」

妻は本紙の取材に、高橋さんがPCR検査を受けら
れたが、「かかりつけ医の判断がなければ検査は受けられない」と告げられたといふ。

高橋さんは二十四日、妻た。

新型コロナ

死亡後に新型コロナウイルス感染が確認されたとして、石川県が十一月に発表した金沢大准教授が、県の相談窓口にPCR検査を希望しながら「かかりつけ医の判断が必要」として断られていたことが、本紙の取材で分かった。准教授には、ぜんそくの疾患があつたという。

(堀井聰子)

ぜんそく男性死後に陽性判明

「シを送つたが返信がなか

った。何度も電話してもつながらなかつたため、知人を通じて金沢大に連絡。二十一日六日に職員が自宅を訪れる

と、既に死亡していた。

その後、保健所によるP

C R 検査で陽性が判明し

た。死亡を証明する死体検

案書によると、死因は「不詳の内因死（病死）」。

直接死因に関係しないが、影響を及ぼした傷病名として

「CO VID-19（新型コロナ）陽性」と記されている。

に「自宅近くの医院で、コロナではないと言われた」などのメッセージを残しているが、医療機関名は告げていなかつた。

厚生労働省はぜんそくについて、コロナの重症化リスク因子に入れていないが、医師によると、コロナでぜんそくが悪化する可能性があるため、一般の人より慎重な診察が求められるといつ。

高橋さんは生物学が専門で、中でも遺伝情報など膨大な数値データを解析する分野で、優秀な若手に研究費を助成する文部科学省の「卓越研究員」に選ばれていた。妻は「とても明るく、いつも全力で頑張る前向きな人。家族のことも大好きでした」としのんだ。

高橋さんが受診相談センターにPCR検査を希望していたことについて、県の判断が、医師に限られていることは良くない。ちょっとでも具合が悪いと思つたら、すぐ検査を受けられるようにしてほしい」と訴えた。

高橋さんは「個別の案件は把握していない」とし、「センターは通常通り対応した。検査するかは患者を診た医師が判断する」とだ」と話した。

高橋准教授が亡くなるまでの経緯

11月16日	強い倦怠感
20日	39度台の発熱
21日	午前、医院を受診し、薬を処方される。午後は37度台まで下がる
	石川県発熱患者等受診相談センターに電話し、PCR検査を受けたいと伝える
22日	せきとのどの痛みを訴える
24日	同じ医院を再受診
25日朝	音信不通になる
26日	金沢大職員が自宅へ行き、死亡している高橋准教授を見つける

※遺族らの話を基に作成